

第 146 回 『わかるように伝えていますか』

坂井 聡

前回、通常の学級にいる発達障害のある児童生徒の様子について紹介しました。では、それぞれについて具体的にどのように関わっていけばよいのか。そのヒントを紹介していきたいと思います。ここでは、その人の特徴が学校生活でどのように顕在化するのかを考えていながら見ていきたいと思います。

○伝えられたことが理解できれば、それを何とかできるように努力する力があり、真面目と評価されることが多い。真面目と評価されることが多いのですが、何とかできるようにならないと評価されないと考えてしまうとできない自分がだめだと自己肯定感を下げてしまうことがあります。努力してもできないことがあっても大丈夫であると伝えることが大切です。努力してもできないことは誰にでもあります。自分だけではないということがわかればよいと思います。

○はっきりしたこと、答えが明確なことへの理解力が高い。見えているものや、計算のように、はっきりしていることの理解力は優れていますが、一方で、あいまいなこと、見えにくいものについては理解できないことがあります。人の感情や気持ちなどは見えないので想像することができないことも多いです。数直線など視覚的な情報を使って伝える工夫などをする必要があります。できるだけ見えるようにして伝えるということです。

○正義感が強い。正義感が強く、周囲に対しても厳しく意見を言うことがあります。クラスメイトの失敗なども、指摘してトラブルになることもあります。このようなことが事前に予想される場合は、クラスメイトには言わないで、まず先生に伝えることというルールにすることができれば、解決することも多くあります。直接伝えてしまうのでトラブルになるということです。正義感が強いことは良いことだと評価することも重要です。

○細かいことを見るのが得意で、小さな違いにも気づくことができる。また、音にも敏感であることがあり、細かい音を聞き分けることができる。この特徴で、周囲の細かいことが気になったりすることがあります。そのときに必要のない発言につながることもあります。そのようなときには、特徴が発揮されたと思って寛容に聞くことが大切です。この感覚の過敏さが、力を発揮することもあります。発明家などは、この感覚に優れていたのではないのでしょうか？

○見通しがもてると最後まできちんとやり遂げようとする。この時間に何をするのかということをあらかじめ伝えることで何をすることがわかるので、活動に参加しやすくなります。視覚的に分かるように示すことが重要です。終わりがわからなかったり、見通しが持てなかったりすると誰でも不安になります。特にこの不安が大きい人達だということです。終わりまでちゃんとしたいという気持ちが強いとも言えます。

○視覚的な記憶力がよく、状況などを視覚的によく記憶している。いやだったことなども視覚的に記憶していることが多く、授業の中で同様の状況が起こるとフラッシュバックといって、いやだった状況を思い出してパニックになることがあります。保健室などで授業を離れて休憩するなどの提案が必要です。そして、忘れる練習もする必要があるかもしれません。忘れるための儀式が必要な場合があります。

○対人関係を構築することや、対人コミュニケーションが苦手なので、社会性がないと評価されやすい。「友だちとは」「友情とは」「親切とは」「尊敬とは」「仲良くするとは」など人間関係を作るために必要だと思われることばの意味が理解できないことも多いので、グループ活動などでの発言でトラブルになることがあります。見えないのでわからないということです。発言がトラブルになりそうになった場合は、「そのように考えるんだね」と承認することが重要です。

～坂井 聡先生のご紹介～

《プロフィール》

香川大学教育学部卒業。金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など、養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部教授。1997年には自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞。自閉症スペクトラム支援士エキスパート、特別支援教育士スーパーバイザー、言語聴覚士。